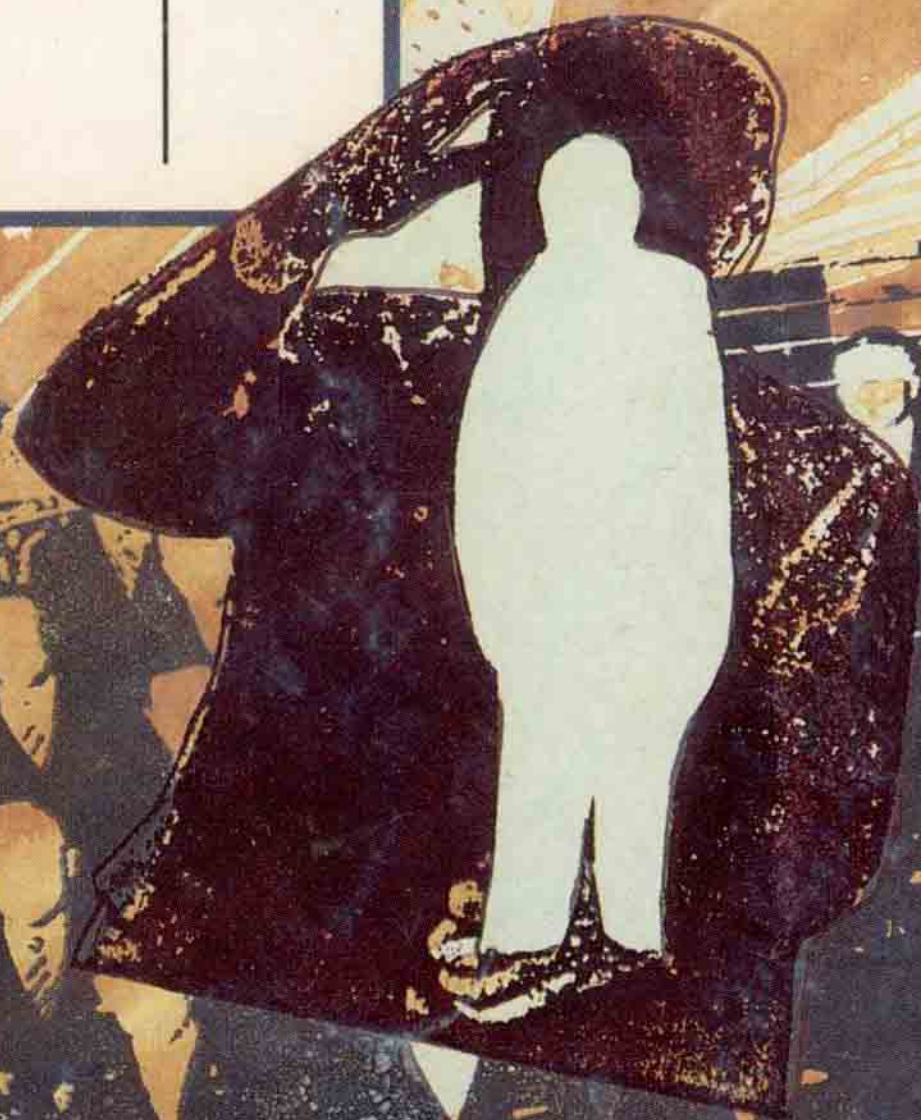


消えた日

キング
帝王が

三好徹



新潮文

キング 帝王が消えた日

新潮文庫

草 382 = 1



昭和六十年一月十五日印
昭和六十年一月二十五日発行

著者 三好徹

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 編集部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社 製本・憲專堂製本株式会社

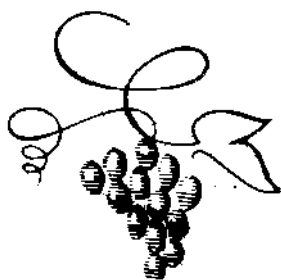
© Tôru Miyoshi 1982 Printed in Japan

ISBN4-10-138201-8 C0193

新 潮 文 庫

^{キング}
帝王が消えた日

三 好 徹 著



新 潮 社 版

3345

目次

第一章	極秘情報		七
第二章	脅迫		三六
第三章	混乱		八五
第四章	闇からの声		一三〇
第五章	病める人びと		一五九
第六章	復活と死		二三三

解説 佐木隆三

キング
帝王が消えた日

第一章 極秘情報

1

小原^{おはら}はその朝七時に目をさました。窓の外を眺めると、雨が降っていた。

「雨のサンフランシスコか」

小原はふとそう呟^{つぶや}いてからタバコに火をつけた。タバコ好きの彼は、一週間の滞米中にたえず肩身のせまい思いをしなければならなかった。飛行機に乗っても、喫煙席はすべて後方に押しやられていた。禁煙席はガラガラに空いていて、乗客は肘^{ひじ}かけをはずし、横になれるが、喫煙席は、数が少いために、たいていは満席になっていた。それでも飛行機はまだしも我慢できた。つらかったのは、アメリカ人たちと会談しているときだった。テーブルに灰皿が置いてないのだ。小原がそれを要求すると、アメリカ人たちは、一様に渋い表情になった。さすがに、遠来の客である小原に遠慮して、はつきりとはいわなかったが、喫煙者を毛嫌いしていることは明らかだった。ワシントン大使館の職員の説明によると、喫煙者が自殺的行爲ともいうべき喫煙をするのは本人の自由であるとしても、その吐き出す煙によって、禁煙

者の健康を損ずる権利はないはずだ、とアメリカ人たちは考えているという。

それを聞いてから小原は、タバコを控えてきた。仕事を円滑にするためには、自分の好みは抑えなければならなかった。

（日本はいいな）

小原はゆったりとした気分でタバコを喫った。九時のホノルル行きに乗って、ハワイへ行くつもりだった。

といつて、観光が目的ではなかった。ホノルルには、現地時間で十一時に到着する。そして、車をとばして、真珠湾を訪れるつもりだった。小原の長兄は、一九四一年十二月七日午前八時にハワイを襲った日本海軍機のパイロットの一人で、そこで戦死したのだ。そのころ、小原はまだ子供だった。小学校にも入っていなかった。だから、長兄についての記憶は、ほとんどない。

しかし、四十年以上も昔のこととはいえ、肉親の死んだ地を素通りにはできなかった。その地に立って見たかった。できることなら花束の一つも、真珠湾に投じてきたい。そのあと、午後一時五十分発の日航機で成田に向う。そうすれば、出張期限までに日本へ帰ることができる。

小原はタバコを消すと、仕度にとりかかった。空港までは三十分である。八時にホテルを出れば間に合う。

小原はヒゲをそってから食堂へ行き、朝食をとった。ハムエッグ、トースト、コーヒで

ある。アメリカにいる間、毎朝同じものを食べてきた。みそ汁、納豆、のり、佃煮、お新香、それに、たきたてのご飯がなつかしかった。洋朝食では、食後のタバコさえも、おいしいなような気がする。

彼は七時四十分に食堂を出た。エレベーターで八階まで行く。部屋は廊下の奥に近いところにある。

部屋の前に、二人のアメリカ人が立っていた。二人ともレインコート姿だった。

（何だろう？）

小原は瞬間的に思った。かれらが自分をたずねてきたことは確かだ、と直感した。

小原とアメリカ人たちとの距離は、急速につまった。そのうちの一人が、彼をじっと見据えていった。

「エクスキューズ・ミー、アー・ユー・ミスター・オハラ？」

小原もかれらを見かえした。何者か、と思った。それを看破したかのように、アメリカ人は、内ポケットからIDカードを取出して見せ、

「FBIサンフランシスコ支局のジャック・サットンです。こちらは同僚のジム・コルバー
ト」

といった。

小原は、いやな予感がした。こんな時刻になぜFBIの捜査員が……と思った。彼は前日までワシントンで、伊藤首相の訪米に伴う警備計画の打合せのために、FBI本部の担当官

と会談してきたのだ。

「東京警視庁の小原です」

と彼は握手を求めながらいった。そして、

「ここでは話もできませんね。食堂へ行きましょうか。出発まであまり時間の余裕はないのですが……」

「わかりました。ただ、食堂よりも室内の方がよろしい。内密な話ですから」

「では、乱雑になっていきますが……」

小原はドアをあけた。

散らかっていた下着類を丸めてトランクに押しこんだ。ベッドは乱れているが、それは仕方がない。小原は二人を椅子に坐らせ、自分はベッドに腰を下ろした。一泊四十ドルの安宿だった。

「お話をうかがいましょう」

小原はタバコに火をつけた。二人の捜査員は、その煙に迷惑げであった。

（かまうものか。ここはおれの部屋だ）

と小原は思った。

サットンは、口のあたりをハンカチでふきながら、喋り^{しゃべ}はじめた。

「じつは、きわめて気にかかる情報が入ってきたのです。しかも、日本の伊藤首相の警護に
関することです……」

「何でしょう？」

「ここのチャイナタウンにグエンというベトナム系の帰化市民がいるのですが、その男のところへ、麻酔銃の改造を依頼しにきた日本人がいるというのです。グエンは、ベトナム戦争時代に、海兵隊の武器修理工場につとめていたことがあって、銃についてはプロフェッショナルな男です」

「麻酔銃というのは？」

「暴れる家畜を鎮めるために、レミントン社が開発したのですが、それは名目で、じっさいには暴徒鎮圧用のものです。おわかりですね？」

「サットン」は片目をつむってみせた。はじめから暴徒鎮圧を名目にしたのでは、世論の非難を浴びる。暴れる家畜が相手なら、文句はいわれない。

「わかります」

「威力はかなりのものです。最大射程距離九十メートル、有効射程距離四十メートル。生命に別条はありませんが、破裂すると、付近の半径十メートル以内の人間ならば、瞬間的に意識を失います。しかし、この銃は、発射のさいにかなり大きな音がする。その日本人は、グエンのところに来て、消音装置をつけてもらいたいといったそうです」

「それが伊藤首相の訪米のさいに、使用されそうだというのでしょうか」

と小原はやや苛立^{いらだ}った口調でたずねた。

「その可能性もあります。しかし、より大きな可能性は日本においての使用です」

「日本人が注文したからですか」

「そうではありません」

「では、なぜです？」

「注文者がグエンにそういったのですよ」

とサットンは落ち着いた声でいった。

小原は一瞬のうちに決断した。ホノルルには寄っている暇はない、と思った。

「もしできることなら、そのグエンという人に会わせてもらえませんか。もちろん、貴国でわたしが捜査しようというのではありません。グエン氏が話して下さるなら、ありがたいという程度のことです」

「あなたがそういわれるだろう、と考えておりましたよ。これから本人と会えるように取計いましょう」

とサットンは微笑していった。

表に車が駐車していた。運転はコルバートだった。サットンは助手席に坐り、後部席の小原の方を向いて話しかけた。

「グエンについて、小原さんは前にお聞きになったことはありませんか」

「ありません」

小原は、サットンがどうしてそんなことをいうのか、理解できなかった。

サットンは小原から目をそらした。しきりにガムをかんでいる。小原はタバコを喫いたか

ったが、辛抱した。狭い車の中なのだ。

「グエンは以前はFBIの要監視リストに掲載されていました。いまでもリストから抹消されてはいませんが、ちょっと事情がありましたね、現在では、監視という状況ではないので、それをお含みおき下さい」

「その男からFBIの方へ情報が入ったわけですね？」

「そうです」

「わかりました」

グエンという男は、いまではFBIの情報提供者になっているのだ。当然ながら、グエンは周囲の人間には、それを知られてはまずいはずである。サットンはそのを含みにしてほしいといっているのだ。

2

車はホテルを出ると、グラント・アベニューを走り、中国風の二層の門が路上をまたいでいる道のほとりにとまった。

小原はうながされて車を下りた。

門をくぐって坂道を上って行くのだろうという予測に反して、サットンは、門の斜め向いにある小さなホテルに入った。

フロントには、東洋人とも西洋人ともつかぬ中年の男がいた。男はサットンを見ると、かすかに顔をしかめた。

サットンが何かいうと、男は鍵^{かぎ}かけから鍵を抜いて渡した。三〇五号室の鍵だった。

速度の遅いエレベーターで、サットンと小原は三階へ上った。コルバートは車に残っていた。

サットンは部屋に入ってから、電話をかけた。

「エミリーかい？ ジャックだ。いますぐきてくれ。ねむいだって？ こっちは時間がないんだ。早くしろよ。例のホテルの三〇五号室だ」

小原は、おかしいな、と思った。

エミリーというのは女の名前である。すると、グエンはファミリー・ネームなのか。エミリー・グエンというのか。

そんなはずはなかった。サットンは、グエンについて「その男」という言葉を使っていた。サットンは、電話を切ってから、

「じつはこの部屋は、グエンに麻醉銃に消音装置をつけるように注文した男が泊っていた部屋なんです」

と説明しはじめた。

「ここに？」

「そうです。指紋については、気にすることはありません。すでに採取してあります。ただ、

種類が多くて、指紋からその注文者を確定できる可能性はきわめて少ないと思います。男は、宿泊カードには、イチロー・イトウと記入しました。この名前、ぼくにはわかりませんが、日本に多い名前ですか」

「アメリカ人というなら、ジョン・スミスというようなものでしょう」

「なるほど。それでは、偽名かもしれませんな」

「わたしもそう思います。で、その男はいつまで、ここに泊っていたのですか」

「きのうの朝までです。チェックインしたのは、その二日前の夕刻。予約なしに入ってきたそうです。年齢は三十歳くらい。身長は五フィート六インチ。髪は黒。サングラスをかけていました」

「そういう身体的な特徴は、ないも同然ですね。日本人にはもっとも多いタイプです」

「やはりそうですか」

「彼がここに泊っていたことが、どうしてわかったのです？」

「グエンが品物を渡したあとで偶然に見つけたんですよ」

「品物を渡した？」

「ええ」

「いつです？」

「おととの夜」

「あなたのところへ情報を提供してきたのは、品物を渡したあとなんですか」